

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月4日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21530791

研究課題名（和文） 演劇的手法を活かした、教師のための信頼関係構築・修復スキル向上プログラムの開発

研究課題名（英文） Developing a Teacher Training Program to Control Off-task Behaviors from the Perspective of “Focus” in Improvisational Theatre

研究代表者

山田 雅彦 (YAMADA MASAHIKO)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：30254444

研究成果の概要（和文）：

児童・生徒の授業過程からの逸脱（課題非従事行動）を抑止・制止するための教師の力量を向上させる研修プログラムの開発をめざし、質問紙調査によって「自信家の若手教師は、課題非従事行動を“毅然として”制止しがちである」「全世代を通じて、失敗を強く恐れる教師は課題非従事行動を一時的に容認しがちである」という二つの傾向を見いだした。それぞれに対応して、「相手を認めることで自分も注目を集める」「ためらいなく大きな声で雑談等に介入する」という教師教育上の課題を挙げ、それらを可能にするための演劇的ワークショップ的な活動を提案した。

研究成果の概要（英文）：

Controlling off-task behaviors has become an important educational issue in Japan. Here, we attempt to develop a teacher training program for controlling off-task behaviors in the context of an improvisational acting class.

Referring to the notion of “Focus” (object of attention) in improvisational theatre, we characterize off-task behavior as the result of a “multi-focus” situation between teachers and students in which the object of students’ attention shifts to something out of the teacher’s control. We categorize strategies used by teachers into three categories: (1) “taking focus”, or directly ordering students to stop off-task behavior and pay attention to the subject matter; (2) “sharing students’ focus”, or shifting the teacher’s attention to the students’ object of attention (e.g., watching what the student is watching or listening to students’ conversations); and (3) “cutting in on students’ focus”, or engaging with students more actively than merely “sharing” in order to shift attention back to the teacher (e.g., standing between the student and what he or she is watching or joining a conversation between students). It seems that many experienced, skilled teachers use the “sharing” and “cutting in” strategies to control off-task behaviors (often without knowing why they are effective).

Through statistical analysis of the results of two questionnaires administered to elementary and junior high school teachers in Japan, we attempt to demonstrate a correlation between the self-efficiency of teachers and strategies used by teachers to control students’ off-task behaviors. The analysis revealed two tasks for teacher training as follows. (1) Novice teachers with high self-efficiency tend to depend solely on “taking focus” to control off-task behaviors. They may repeatedly shout “Stop it and look at me!” or “Quiet please!” in response to off-task behaviors in the classroom. If the students subsequently disobey these commands, the teacher will not have any alternative strategies. (2) Teachers who are afraid of failure tend to depend on “sharing students’ focus” or “cutting in on students’ focus.” Such teachers suffer from low self-efficiency; however, if they can learn to talk about the subject matter at the appropriate moments, they can overcome off-task behaviors in the same manner as skilled teachers.

We propose concrete exercises for these two tasks and point out that the strategies of “sharing students’ focus” and “cutting in on students’ focus” are also effective as typical teaching strategies.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：課題非従事行動、フォーカス、学級崩壊、自己効力感、質問紙調査

1. 研究開始当初の背景

(1)1980年代半ば以降、児童生徒の教師に対する不服従が社会問題化した。この問題を解決するために、教師にはより高いコミュニケーションスキルが求められるようになった。

このような事態への対応方法について、主として「よく言って聞かせる」「辛抱強く話し合う」といった、言葉による説得に頼るのが提唱されてきた。しかし、説得の重要性は20年にわたって指摘されてきたにもかかわらず、事態は一向に改善せず、説得に代わる、少なくとも補完するコミュニケーションスキルの開発が、教育学研究における喫緊の課題の一つとなっていた。

(2)研究代表者の一連の研究により、授業の進行に直接関係しない児童・生徒の言動（課題非従事行動）とそれへの教師の対処方法を、即興劇におけるフォーカス（注目の対象）という概念を援用することで構造的に把握できるようになっていた。それによれば、課題非従事行動とは教師と児童・生徒の注目の対象が異なってしまう「フォーカスが割れる」という事態であり、これへの教師の対処方法は3種類に分類できる。課題非従事行動を直接制止する「フォーカスを（直接）取る」、課題非従事行動を一時的に容認する「フォーカスを共有する」、課題非従事行動を助長するような言動を教師自身が積極的にとる「フォーカスに入る」の三者である。

2. 研究の目的

本研究は、児童生徒の教師に対する不服従や、保護者からの苦情対応といった、教師の

教育活動をめぐる人間関係上のトラブルが多発している状況の克服を志向して、教師のコミュニケーションスキル向上に寄与する教師教育プログラムの開発を目指したものである。具体的には以下の3点を意図した。

- (1)教師が人間関係上のトラブルを克服するために必要なコミュニケーションスキルが具体的に何なのか明らかにする。
- (2)そのコミュニケーションスキルが、演劇的なワークショップを通じて向上することを明らかにする。
- (3)短時間で即効性のあるコミュニケーションスキル向上プログラムを開発する際に注意すべき事項を特定する。

3. 研究の方法

(1)自治体教育委員会の協力を得て、当該自治体の公立小中学校の教師を対象とする質問紙調査を実施して、課題非従事行動への対処法と教師の自己効力感との関係を追究した。

(2)その質問紙調査によって明らかになった教師教育上の課題に応じて、演劇的ワークショップの内容から有効性を期待できる具体的な活動を挙げ、熟練した指導者がいなくても活動を実施できるよう実施要領を示した。

(3)実際にワークショップを受講した経験のある教員養成課程学生への質問紙調査によって、ワークショップ実施の際の留意点を追究した。

4. 研究成果

(1)質問紙調査の結果、「自信家の若手教師は、課題非従事行動を“毅然として”制止（フォーカスを取る）しがちである」「全世代を通じて、失敗を強く恐れる教師は課題非従事行動を一時的に容認、助長（フォーカスを共有、フォーカスに入る）しがちである」という二つの傾向が示唆された。「共有」と「入る」の間には強い相関関係が見いだされたため、両者を総称する概念として「フォーカスに応じる」を用いることとした。

(2)示唆された二つの傾向の前者については「対処方法の選択肢が少ない若手教師が、教師の権威を承認していない児童・生徒を制止しても児童・生徒が制止に応じず、課題非従事行動がエスカレートし、それを周囲の児童・生徒が観察・模倣することで教師の権威がさらに失墜する」というリスクの存在を指摘した。その上で、「フォーカスを取るだけでなく、フォーカスに応じることの有効性を早い時期に知る機会をもうける必要がある」と教師教育上の課題を指摘した。

(3)後者については、「課題非従事行動の容認・助長は、経験的に有効性が知られている“名人芸”の一種であり、失敗を恐れる教師によるそれが現時点では不作為や迎合といった消極的な理由からであったとしても、その名人芸に一步近いところにいる」と現状の再評価を行った。その上で、「容認・助長から一転して授業関連の発話を開始することができるかどうか名人芸と不作為・迎合の境目であり、そのような唐突な話題転換を可能にする教師教育プログラムを開発できれば、失敗を恐れる教師の力量向上とバーンアウト抑止が期待できる」と教師教育上の課題を指摘した。

(4)前者の課題に対応するプログラムとして、「一人ずつ舞台上に出てゆき、それまで舞台上にいたすべての人よりも目立つ」という活動が有効であることを示し、具体的な実施要領を詳細な図解とともに示した。

(5)後者の課題に必要な教師の能力として、話題転換のタイミングをはかる判断力、判断と同時に発声する身体能力、話題転換のための適切な発話内容、の三者を指摘した。その上

で、それらの中で比較的短期間で向上しうるのが発声のための身体能力であり、そのために事前の吸気を伴わない発声練習が有効であることを指摘し、具体的な発声練習の方法を連続写真を用いて示した。また、適切な発話内容を選択して話題転換を図るための基礎研究として、児童・生徒の抗弁に対する教師の切り返しがどのような話題・話法によって行われているを整理・分類した。

(6)一連の教師教育プログラムは、学部教育や初任者研修といった相対的に早期の教師教育において実施される必要があるが、教育実習をはじめとする学部教育で体験する教育実践場面では、フォーカスに応じる授業技術が役立つ場面に遭遇することが少なく、その有効性を実感しにくいことが明らかになった。それらの技術が必要になるまで知識としてだけでもフォーカスに応じる技術の意義を認識し続けていてもらうために、「子どものつぶやきに耳を傾ける」というよく知られた授業技術が、フォーカスに応じることの派生であることを指摘し、フォーカスに応じる技術を子どものつぶやきに耳を傾ける技術の向上という形で通常の授業技術に貢献させることの有効性を示唆した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①池田修 2013 「即時口頭指導に関する一考察—『こんな時どう言い返す』を手がかりとして—」『京都橋大学研究紀要』第39号, 43-73頁.

②山田雅彦・山口裕也 2011 「若手教員の課題非従事行動への対処方法に関する質問紙調査—統制行動を考える新たな視点「フォーカス」に着目して—」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I (教育学講座・教育心理学講座)』第62集, 121-132頁.

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/108083>

[学会発表] (計1件)

①山田雅彦・山口裕也・池田修 2010 「統制

行動を考える新たな視点としての「フォーカス」－教師の統制行動に関する質問紙調査結果から－『日本学校教育学会第25回研究大会研究要旨集録』36-39頁.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~yamadama/papers/kaken21530791.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 雅彦 (YAMADA MASAHIKO)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：30254444

(2) 研究分担者

池田 修 (IKEDA OSAMU)
京都橘大学・人間発達学部・准教授
研究者番号：50434668